

北陸大学図書館報

NO.48



◆◆ 第19回読書感想文・第1回書評コンクールの 審査を終えて ◆◆

図書館長・薬学部教授・読書感想文コンクール審査委員長

鍛治 聡

このたび第19回読書感想文・第1回書評コンクールが実施され、最終的に感想文116編、書評31編の応募作品がありました。コンクールに参加してくれた学生の皆さんと本学教員・職員・関係者の方々に御礼を申し上げます。誠にありがとうございました。厳正なる審査の結果、最優秀賞1名（感想文）、優秀賞4名（感想文3名、書評1名）、佳作5名（感想文4名、書評1名）、努力賞13名（感想文11名、書評2名）の計23名を選出させていただきました。一つひとつの作品に読書への思いが感じられました。

令和2年1月14日（火）17時15分から図書館本館4階ソフィアルームにおいて、コンクールの表彰式並びに優秀賞以上の入賞者によるビブリオトークが行われ、入賞者への表彰状と記念品が授与されました。審査委員、図書館委員にご出席を頂き、入賞者と記念撮影を行いました。ビブリオトークでは、入賞者に作品図書を手紙に、図書紹介と読書への考えを発信してもらいましたが、そのパフォーマンス力に圧倒されました。

私見ですが読書感想文とは、まず、本を読んで疑似体験をして、そして出力して自身の学修と成長に繋がる所作だと思います。今回の、最優秀賞の『フェルマーの最終定理』は、その発想に巻き込まれてみることで、天才の考え方になじみというか、こんな考え方ができるのかと垣間見ることができるのかもしれません。それを“数学者達の美学”というタイトルに命名した感性に脱帽です。また、『ジャッジメント』にいたってはコメントすることすら避けたい状況を疑似体験し、その体験を表現してくれています。さぞかし辛い緊張感、ストレスを感じながらも、よくぞ書き上げてくれたと推察します。正直大変な葛藤を感じたことと思います。

私自身は、見たもの、読んだものを人に伝えることが極めて苦手です。中国歴史ものの本、そしてジャンルを問わず映画（DVD）を見るのは大好き、シーンシーンはかなり頭の中というか、脇の裏に浮かびます。ところが、問題が！うちの妻にですね、読んだ本、見た映画を説明しろと言われて大弱り。できないのではなく、あれもこれも盛り込んだあげにくどくどと続けると、妻からひと言よくわからん！あのシーンもあった、このシーンもと加えていくと時期が極めて悪い。例えば映画フォレストガンプを一言ではそもそも無理と思うのだが……。一生懸命になればなるほどフォーカスがぼやけてしまう。大事なところはどこ？ちなみに、うちの妻の映画や本の紹介を聞くとても分かりやすい。彼女のほうが頭いいしなあ……。なぜ2時間の映画を1分以内に収められるのか？は表現力のない輩の愚痴として……。表現する力を磨く努力を全くしていなかったのも事実。感じて、表現できなければその効果はあったか怪しげになるのですよ。感想文？自主的に参加した覚えはない。書くことを課題として出されたときにおいてさえ、ひょっとしたら出していないかもしれない。ちなみに、前号での物理で課された読書感想文の宿題は出していない。

まず、本を読み疑似体験をし、その結果得た成果を表現することをやってみて欲しいです。できれば、メモを取りながら読み進めて欲しいです。自分の本であれば、ラインを入れたり折目をつけたりできますけども、図書館の本にはやってもらっては大変困ります。くどいようですが、出力があつてこそその学修である（半分以上自分に言っています）と思います。そして、数を重ね基盤を強固にしていきましょう。

実は、入賞者作品に共通するのは要約が上手にできています。キーワードを見逃すことなくピックアップできています。そして、気持ちや考えの変化を鮮やかに表現し、書き綴っています。両方がそろっている作品が高評価を得ています。多くの学生さんにこのプロセスに取り組んでもらい、成長を果たしてほしいと願います。

第19回読書感想文・第1回書評コンクール 審査結果発表

応募作品147（感想文116・書評31）編の中から、次の作品が選ばれました。

入賞作品

最優秀賞(読書感想文の部)

宮崎 琴音さん 数学者達の美学 (薬) 1年

優秀賞(読書感想文の部)

中多 萌さん 『永遠の0(ゼロ)』を読んで (薬) 1年

臼井 真紀さん 私の生き方 (国) 1年

北浜 志穂さん 『ジャッジメント』を読んで (医) 1年

優秀賞(書評の部)

斉藤 こゆきさん 『人魚の眠る家』を読んで (国) 1年

佳作(読書感想文の部)

竹田 愛莉さん ころろを揺さぶった一冊。 (国) 1年

澤井 祐衣さん カンパニー (医) 1年

中之庄 桂花さん 小説のつづき (医) 1年

山腰 るなさん 子供たちの息苦しさ (医) 1年

佳作(書評の部)

西川 瑠々伽さん 生と死を巡って (国) 1年

努力賞(読書感想文の部)

熊野 颯大さん ほんとに大事なこと (経) 1年

西田 明純さん 日本語について (経) 1年

左 心雨さん 人生は茶の如し、甘苦自身を知る (経) 3年

杉澤 未唯さん ありのままに生きる (国) 1年

太長根 桃子さん 「春、戻る」が私に教えてくれたこと (国) 1年

澤野 雛子さん 自分の世界が変わった瞬間 (医) 3年

澤野 雛子さん 舌という魅力的な器官 (医) 3年

柄澤 李佳さん 愛と死 (医) 1年

近藤 由萌さん 『人魚の眠る家』を読んで (医) 1年

樋上 春菜さん 『サイレントブレス』を読んで (医) 1年

松本 茉尋さん 強くなる秘訣 (医) 1年

努力賞(書評の部)

駒津 咲子さん 患者主体の医療とは 書評 (医) 1年

松下 知世さん 『よるのばけもの』を読んで (医) 1年

ベストタイトル賞

宮崎 琴音さん

数学者達の美学

(書名『フェルマーの最終定理』)

(薬) 1年

* (薬) は薬学部、(経) は経済経営学部、(国) は国際コミュニケーション学部、(医) は医療保健学部です。

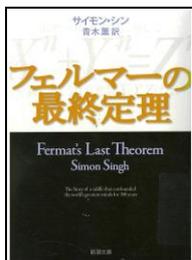


表彰式 (令和2年1月14日)

最優秀賞 (読書感想文の部)

数学者たちの美学

薬学部 1年次生 宮崎 琴音さん



書名 フェルマーの最終定理
著者 サイモン・シン 訳者 青木 薫
出版社 新潮社

心が震えた。鳥肌が立った。本を読んでこう感じたのはいつぶりだろうか。数学者たちの一つの難問に立ち向かう姿を写し取ったこの本は心に訴えかける力を持っていた。

私がこの本を手にとった理由は単純に題名に惹かれたからである。私が高校生の時に最も苦手としていた科目が数学だった。高校には東大の入試問題を「ほーら解ける、簡単だねえ」と言ってすらすら解いていく先生や「この証明は美しくない」と解答冊子に文句をつける先生方がいた。私は数学の先生はこういう人ばかりなのかと少し嫌になっていた。それと同時に数を、数式を、証明を一つの趣味のように楽しむ姿に憧れた。そんな数学に対する複雑な思いと興味からこの数学者たちの戦いの物語を読み始めた。

物語は17世紀、フランスの数学者であるピエール・ド・フェルマーが本の余白に残した数式に次のようなメモを残したところから始まる。「私はこの命題の真に驚くべき証明を持っているが、余白が狭すぎるのでここに記すことができない。」以来300年以上にわたって数学者たちはフェルマーの最終定理と呼ばれた数式の証明に挑み、跳ね返されてきた。そして遂に、アンドリュウ・ワイルズによって解かれることとなる。ワイルズは子供のころにフェルマーの最終定理に出会い、魅了される。そして30年の時を経て大挙を成し遂げる。若者が活躍する数学という分野で40を超えるワイルズがやっけてのけたということ、数学最大の謎を解決すべく完全な秘密のうちに研究を続けてきたことは驚くべき事実である。さらに証明を発表した後に欠陥を指摘されるという悲劇からわずか1年で工夫と閃きを武器にこの問題に終止符を打ったのだ。しかしこの本の主人公がワイルズだけかといわれると私は違うと考える。なぜならワイルズは多くの優れた数学者たちが悪戦苦闘しながら明らかにしてきた過程とツールの上に成り立っているからだ。-オイラー、ジェルマン、コーシー、ラメ、ガロア、谷口、志村- 彼らはその

人生をかけて数学に打ち込み、証明する手立てを探ってきた。3日3晩寝ずに答えを探し失明する者や監獄の中でさえ謎を明かそうとする者もいた。彼らの完全かつ洗練された証明を求める情熱に感動した。そして数学の奥深さを知り彼らの見つけた定理や法則を美しいとさえ思えた。

この本を読んで感じたことは、夢や目標に向かって取り組むことが大切だということだ。証明を完遂したワイルズはもちろん、そのほかの数学者も数学にとって意義のある研究を残せたはずだと誇りを持っていた。そしてこの本を読むことで数学は長い歴史の中で発展してきたのだと改めて気づかされた。私たちが当たり前にする無理数の存在をかの有名なピュタゴラスは認められず、その存在を示唆した弟子を殺したという話には驚いた。虚数、背理法、微分積分なんてことないように習ったこれらのツールが歴史上の偉大な数学者によって編み出され、受け継がれてきたバトンなのだと気が付いたとき感慨深く思えた。そして私の思考は基礎ゼミで学んだ薬学史へと移った。伝染病の対抗ができなかった時代から、病因、感染経路の解明、ワクチンの創生、有効物質の発見を経て今に至る。私たちは先人たちの恩恵を強く受けているのだと感じた。そしてこのバトンをさらに素晴らしいものにして後世に伝えていくのが我々の役目なのではないかと思う。

私はかつて薬の研究開発に携わるという夢を持っていた。しかし受験でさらっと一行で書かれた問題と白紙の答案を前にして手も足も出ないという経験から虚無感と数学への苦手意識を感じた。理系としての自信を失い研究も向いてないのではと思った。しかしこの本から受験数学とは違う魅力を感じ、もう一度数学に向き合ってみたくさえ思えた。ワイルズたちのまっすぐ問題に立ち向かう姿や諦めない姿は私に勇気と希望を与えてくれた。難題にくじげずあらゆる手を尽くそうとする彼らは私の目に輝いて映り、研究者のロマンを見せつけられた。私は彼らのように天才でないことは十分心得ている。しかし幼いころから憧れていた薬学という分野への情熱はある。なら挑戦してもいいじゃないか。そう考えると勝手に自分の限界を決めていたことがばかばかしく思えてきた。何世代もの数学者ができなかったことを自分ではできると考えた大胆不敵な幼少期のワイルズのように自分も自分で選んだこの道を自信をもって突き進みたいと思えた。私には理解できないと偏見を持っていた数学者たちの姿に肩を押されるとは思ってもみなかった。彼らは優秀なことは確かだが自分の好きなことにまっすぐだった一人の人間であることに変わりなかった。「本は人を豊かにする」とよく聞かされた私にとって価値観を広げ、将来に前向きにさせてくれた素敵で一冊に出会えたことを嬉しく思う。

審査委員講評 濱田 敏彦 (医療保健学部准教授)

宮崎さんは「フェルマーの最終定理」から数学の奥深さを知り、定理や法則が美しいと思えたと述べています。そして感想文のタイトルを「数学者たちの美学」とし、ご自身の数学に対する複雑な思いと興味を素直に表現しています。苦手としながらも受容するその豊かな感性は、思い描いている夢の実現へとつながるものと思いました。また、本との出会いが感性の刺激エネルギーとなることをひしひしと感じられる素晴らしい感想文だと思います。これからも多くの本に触れて未来の扉を開いてください。

優秀賞（読書感想文の部）

『ジャッジメント』を読んで

医療保健学部 1年次生 北浜 志穂さん



書名 ジャッジメント
著者 小林 由香
出版社 双葉社

まずこの本を簡単に説明すると凶悪な犯罪が増加する中制定された「復讐法」、殺害された身内が犯罪者に対して同じ方法で合法的に復讐できる法律。5つの事案があげられ執行監視員の鳥谷文乃が主人公として復讐をする執行者の葛藤やら本当の事件内容を垣間見てこの「復讐法」の在り方

を考えていくといった内容でした。今年7月に京都アニメーションのスタジオに男が侵入、ガソリンを建物1階や従業員などに向けライターで着火した。それにより火災、爆発が生じた。33人の死亡、36人が怪我を負い病院に搬送されたという大きな事件がありました。それ以外にも最近、心を痛めるようなニュースが昔に比べて増えたように感じます。だから、私はこの本を見つけたとき、復讐法はあってもいい法律なのかもしれないと思いました。でも、この本を読み進めていくとやはりあってはならないと思い直しました。

物語は1つ目が子供を殺された父親の話。2つ目が母を実の娘に殺された女性の話。3つ目が通り魔に殺された3人の遺族の話。4つ目が息子を殺された母親の話。5つ目が妹を実の母親とその内縁の夫に殺された兄の話となっています。私は最後の話がかなしくて印象に残っています。虐待を受けていた小さな兄弟。妹が餓死するのを見ていた小学生の兄は復讐法を選び、加害者には妹と同じ様に餓死させようとします。しかし、最後は執行者の兄が死ぬという衝撃のラストになっていました。この話を読んで何とも言えないような、やるせない気持ちになりました。この法律があることで凶悪な犯罪は減るかもしれません。しかし、執行者は加害者を殺したという事実が残るし一生背負って生きていくと考えるとやっぱり賛成できないなと思いました。

この物語は復讐法を執行する応報執行者をサポートする執行監視員の目線で描かれています。応報執行者の苦しみや葛藤、そして同時に執行監視員の苦しみや葛藤が描かれています。執行監視員は執行時、見守ることしかできません。なので、苦しんでいる執行者をみてこれが本当に正しいのかわからなくなるのだと思います。また、自分が当事者だったらどうするかということを考えずにはいられません。本を読む前までは自分の大切な人を傷つけた犯人に復讐できるのなら絶対すると思っていました。しかし、5つの物語を読んで執行者の苦しみや葛藤が痛いほど伝わってきて、もし自分だったらと考えると復讐すると断言はできないなと思いました。復讐できれば気が晴れるというものではないし、復讐するということは自分も殺人者になるということ。いくら考えても答えは出ませんでした。

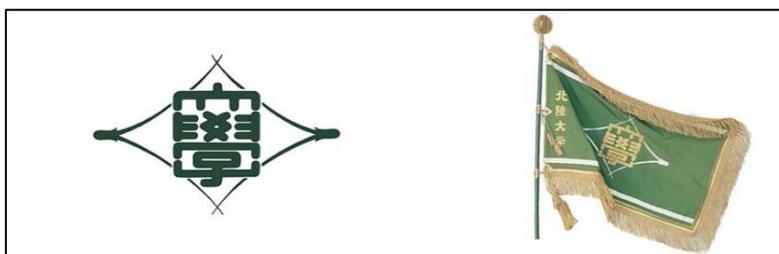
凶悪な犯罪が起きたとき、犯人も殺された人と同じ苦しみを知ればいいのにと確かに思ったことがあります。しかし、それは所詮他人事だからそう思うのかもしれない私は思います。被害者の遺族は復讐を考える前に、あの時あえていけば、こんなことしなければと自分の欠点を見つけ苦しみ、自責の念に駆られます。だから私は、実際に大切な人を失った人にしかわからない話なのかもしれないと思いました。人は他人の痛みを理解できないから、傷つけてしまう。同じ立場になって初めて理解できる。ひどい殺され方をしたら犯人を同じ目に合わせていい。そんな法律があったら世の中はどのようなのでしょうか。すごく考えさせられる作品でした。

私はこの本を読んで復讐について考えることは難しいと感じました。復讐を望む気持ちまではわかって、実際に自分の手で復讐するというプレッシャーについては考えたことがなかったので今回考えることができました。しかし、結局のところ読む前よりも読んだ後のほうが復讐することが正しいのか正しくないのかよくわからなくなりました。結局のところ読む前よりも読んだ後のほうが復讐することが正しいのか正しくないのかよくわからなくなりました。それだけ復讐について考えることは難しいことで、答えは一生出ないのだと感じました。

審査委員講評 鍛冶 聡 (図書館長・薬学部教授)

フォーサイズ！見てきたような嘘を書き。優れたサイエンスフィクション (SF) 作家への誉め言葉。誉め言葉なんぞいうと軽いですが、本当に優れた描写と矛盾がなくシチュエーションが進んでいきます。ジャッジメントはSFではないと思いますが、限りなくホラーや戦争ものなどで現れるシーンが生々しく進行してことが書かれ、そして登場人物、当然復讐法の復讐する側とされる側、それぞれの心情が第三者の目で淡々と進行していくさまが観察・記述されていきます。その第三者がいつの間にか読者自身の思いを代弁しているように感じられます。読み手を執行者にも被執行者にもしない作者の工夫だと思いますし、読み手に代わって葛藤してくれているとも感じました。北浜さんは、この第三者である執行補助者(?)の体験をまさしくされたのではないのでしょうか。その気持ちが極めて良く分かる作品でした。

◆◆ 北陸大学の校章と校旗 ◆◆



北陸大学の校章は、学校法人松雲学園(現学校法人北陸大学)の「松」と、創設者・初代理事長林屋亀次郎邸(現北陸大学教養別館)の「五人扶持の松」を想定し、五代藩主前田松雲公の「松」の意をも含め、大学のとこしえの発展を祈念して松葉菱紋形が取り入れられました。

優秀賞（読書感想文の部）

私の生き方

国際コミュニケーション学部 1年次生

臼井 真紀さん



書名 美丘
著者 石田 衣良
出版社 角川書店

人生について考えたことがあるだろうか？人間は感情を持つ生き物であるし、「人生山あり谷あり」という言葉も耳にタコができるほど聞いた。でも、いざ追い込まれると「生きていいのかな」「いっそのことここで死んでしまえば」と思ってしまう弱い私はある日、何となく立ち寄った本屋でこの本と出会った。作者はあの日本を代表する作家である石田衣良さんだ。題名の美しさと親しみのある作者名からこの本を手にとったが、読み進めていくうちにいつのまにか吸い込まれてしまっていた。

美丘は生きていたということを証明するように、この本は日記のように書かれている。一見、自由奔放に見える美丘は自分が不治の病に侵されているからこそ、命の尊さを痛感しているのだと思った。自由奔放というよりも今という瞬間を大切にするために本能で生きているという感じだった。最初は美丘の大胆な行動に呆れたり驚いた様子だった同級生が自然と彼女から目が離せなくなっていったのは美丘の生命力のある真っ直ぐな生き方に惹かれたのだと思った。美丘の恋人である太一もその一人だ。彼はどんなに美人で秀才で優しく裕福な麻理のような女性よりも美丘の生き様に惚れ、美丘とこの先を共にしていこうという強い意志が語りからも伝わってきた。周りに馴染もうとどこか息苦しいような、何か形にとらわれたような。私は太一と同じ生き方をしていたのだと気付いた。

「時間は永遠にはない。わたしたちはみんな火のついた導火線のように生きてる。」これは私がこの本の中で衝撃を受けた一節だ。大学生であるから人生なんてまだ長い、今日を無駄にしたとしても痛くも痒くも無いと思っていたが、人生は刻々とカウントダウンされていることを再確認した。「その人らしさをつくるのは、過去の傷じゃなくて、未来への希望」この一節は、私に私は私だと語りかけてくれた。自分を変えるのは自分だから、過去にくよくよするのはなく前を見ろと今までの私の方向性を正してくれた。この世界から消えてしまった美丘はいつまでも心の中で生きているという太一の深い愛情に胸がぎゅっと締め付けられる感覚を覚えた。私には数年前に亡くなった曾祖母がいる。会う度に痛々しい第二次世界大戦の話をしてくれた。何回も何回もしてくれた。これからの日本を担う世代である私に訴えかけるように涙ぐみながら話をしてくれた。私は戦争を経験していないので、資料に目を通して想像するしかできなかった。だが、曾祖母は自分が生きてきたことを私に確実に証明してくれた。おしとやかで優しい大好きな曾祖母だった。美丘と相反する性格だが、今日という日を無駄にせず一生懸命に生きていたこと、そして自分が生きてきた証を残したことは美丘と共通している。「ぼくは今も目覚めたまま、きみの夢を見ている」これは私もまさに同じ気持ちだった。

読み終えた後には涙が止まらなかった。それは感傷の涙ではなく感動の涙だった。特にこれといった目標など持っていなかった私は大きく成長した気がした。少し強くなったようにも感じた。美丘のように強く真っ直ぐ生きていきたいという憧れを覚えた。「今日という日を無駄にせず、一生懸命に生きること」をこの本から学んだ。自ら命を断とうとすることも考えていた私は今までの愚かさを情けなく思った。生きているだけで幸せなのだ。長かろうと短かろうとみな同じ命がある。命を燃やして生きている。ならば、限りある命を懸命に生きた方が後悔は無いだろう。これからはこれを座右の銘として一度きりの人生を他人に左右されず、自分らしく大切に噛み締めて歩いていこうと決心した。今からでも遅くはない。そしていつか私が生きてきた証を残す人が現れることを願っている。

審査委員講評 倉島 由紀子（薬学部講師）

手に取るのに少し躊躇してしまうような表紙の本書に対し、筆者はその題名の美しさに惹かれたそうです。若い筆者に対して「美丘」は、「時間は永遠にはない」という、人はみな知っているのに普段は意識しない（しないようにしている）事実を、まるで美しい丘から一陣の風が吹き抜けていくように、改めて強烈に訴えていきました。美丘と同年代の筆者だからこそ、その風をより敏感に受け止められたのでしょう。筆者の生の証人が現れることを願ってやみません。

優秀賞（書評の部）

『人魚の眠る家』を読んで

国際コミュニケーション学部 1年次生

齊藤 こゆきさん



書名 人魚の眠る家
著者 東野圭吾
出版社 幻冬舎

人魚の眠る家—とても美しく繊細な題名であったので、この本を初めて目にしたとき、この物語がまさか小さな女の子の長期脳死、そしてその家族や周囲の人間の過酷な運命、残酷な現実を描いたものだとは思わなかった。この小説は東野圭吾氏が 2015 年に発刊したものだ。東野氏は 1958 年大阪府生まれで、エンジニアとして勤務しながら 1985 年『放課後』で江戸川乱歩賞を受賞しデビュー、以来多くの作品が様々な賞を受賞、映像化されており、広い世代に名を轟かせている作家だ。しかし東野氏はこの作品について、執筆後も「こんな物語を自分が書いていいのか？」と悩み続けていたようだ。

舞台は東京、広尾。娘の小学校受験が終わったら離婚する、そう約束した仮面夫婦、和昌と薫子のもとに、娘の瑞穂がプールで溺れて意識不明の状態、と悲報が届いたのは、面接試験の予行練習の直前だった。瑞穂に回復の見込みはない、和昌と薫子は医師からそう宣告されてしまう。さらに瑞穂をどのような形で送り出すか、つまり瑞穂の心臓が止まるのを待つ心臓死、二人が臓器提供に承諾する脳死、どちらかの選択を迫られる。

脳死、これは倫理観などの対立により今でも世界中で議論されている非常に難しい問題だ。日本では、まだ国民の理解が十分に得られていないこともあり、臓器提供に承諾しない場合は心臓死をもって人の死とされる。つまり、和昌と薫子が臓器提供を承諾した場合瑞穂は脳死（＝死亡）、臓器提供を拒否した場合心臓が止まるまで瑞穂は生き続けることになる。極端に言えば、瑞穂の生死を決めるのは和昌と薫子だということだ。結果として二人は臓器提供を一度は承諾するのだが、脳死判定を行う直前で考えを覆し、臓器提供を拒否する。この判断によって、二人と瑞穂の弟の生人、そして家族を取り巻く運命が大きく変わっていく。

この小説を読み終えたとき考えたのは「自分は愛する人のためにどれほど狂えるか」ということである。あれから薫子は、広尾の自宅に瑞穂を連れて帰り自宅で看病し、瑞穂を普通の元気な女の子として育てていくことを決めた。瑞穂が目覚めた時に周りに置いて行かれないように家庭教師を雇って勉強させたり、車いすに乗せて散歩にも連れて行ったり、さらには和昌の会社で開発された特殊な機械で運動させたりもした。しかしこの状況、第三者から見れば違和感、もしくは不気味でしかないのだ。なぜなら、辛辣だが実際には瑞穂は死んでいるのと変わらないからである。誰が死んだ人間を運動させたり、散歩させたり、勉強させたりするだろうか。なぜ薫子は、生きている死体の状態の瑞穂にここまでことができたのだろうか。なぜ周りの人間から説得されても現実を認めなかったのだろうか。答えは薫子が瑞穂を、言い表せないほど深く、愛していたからである。「瑞穂のために狂えるのは私だけ」、薫子はそう言った。よほど愛情がない限りここまでできない。中には「少しやりすぎでは」と思わせるような自己中心的な行動や発言もあり若干の苦手意識も生まれたが、それも娘への深い愛情ゆえだったのだろう。

この作品では、家族愛、登場人物を取り巻く運命が、セリフや巧みな背景描写で見事に表現されている。また「脳死」という難しい問題についても非常に分かりやすく、すんなり理解できる説明もある。愛とは何か、愛について疑問を持っている人には是非お勧めしたい一冊である。

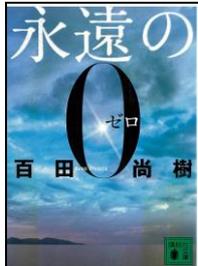
審査委員講評 大東 万里絵（国際コミュニケーション学部講師）

ある日突然愛する人が脳死だと告げられたら、どう受け止めたらよいのか。とても難しく決して一言では語ることはできない脳死をテーマに描かれた東野圭吾氏の「人魚の眠る家」をわかりやすく、筆者の独自の観点から述べられている。「狂ってでも守らなければならない」家族への深い愛とその葛藤を描いたこの名作をあなたも是非読んでみたくなることだろう。

優秀賞（読書感想文の部）

『永遠の0（ゼロ）』を読んで

薬学部 1年次生 中多 萌さん



書名 永遠の0
著者 百田 尚樹
出版社 講談社

「必ず、生きて帰ってくる。たとえ腕が無くなっても、足が無くなっても、戻ってくる。たとえ死んでも、生まれ変わってでも、必ず君の元に戻ってくる」

これは海軍航空隊員宮部久蔵が妻に言った最後の言葉である。

天才的操縦技術を持っている一方で、海軍航空隊一の臆病者といわれ、誰よりも命を惜しむ人だった祖父、宮部久蔵。しかし、祖父は特攻で亡くなった。自分の戦闘機の不調を見抜き、それに乗れば不時着で生き残れる可能性があることを知っていながらその戦闘機を自分の命を救ってくれた青年大石に譲って。なぜ、誰よりも命を大事にしていた祖父は特攻で命を落としたのか。そんな宮部の生涯に孫の健太郎が迫っていく。

私が最も考えさせられたのは、なぜ宮部が自身の戦闘機を譲ったのか？ということだ。ただ臆病者で命が惜しい人なら生き残りのクジを掴んだら離さないはずだ。それは、宮部が大石の命がけの行為のおかげで生き延びられたことに感謝し、今度はその恩返しに大石の命を救いたい、そして、その後幸せな人生を歩んでほしいという思いがあったのではないか。これを裏付けるのが、エンジントラブルにより死を覚悟していた大石に「絶対にあきらめな。何としても生き残れ！」と言ったこと、宮部がどんな役職の人にも丁寧な言葉で話し、感謝を忘れなかったということである。

また、大石が宮部を守るために重傷を負った際、妻の仕立て直した外套を渡し、交換した戦闘機には「もし、大石少尉がこの戦争を運良く生き残り、私の家族が路頭に迷い、苦しんでいたなら、助けてほしい。」という走り書きを残したことから、大石が重傷を負った頃には既に自身の遅くない特攻の可能性を悟り、仮に自分が特攻で死んだら大石に自分の大事な妻子の未来を託したい、託すことができると考えたのではないかと。

このような究極の命の選択を行った宮部は決して臆病者ではない。多くの隊員が国のために死を覚悟した時代だったため、臆病者だといわれたが、この考えは妻子のことを一番に考え、どれだけ恥をかいても妻子の待つ場所へ帰ってくるのだという大変強い責任感と心優しさによるものである。そのため、周りからの批判に屈せず、幾度も戦禍を潜り抜けてきた宮部は超人的な集中力、勇気を持った男であるといえるだろう。また、宮部の生き方から、自分の命なのにそれへの執着が異質とされる雰囲気を作った戦争は恐ろしいものである。特に私と年齢の近い若者が特攻で次々と亡くなったという事実は、とても心苦しく、また信じられなかった。今当たり前のようになっている、大学へ行ったり、家族と喋ったりする時間が実はかけがえのないものであり、その時代を生きる私は恵まれているのだ。

はたして、私は彼のような家族愛・責任感・優しさ・決断力に溢れた生き方をできているだろうか。いや、できていないだろう。戦争のある時代を生きておらず、まだ生死をさまよう大病をしたこともないため、命に関わる究極の選択をしたことがない。また、家族は私にとってかけがえのない人達であるが、当たり前にあるもので宮部ほど深く考えたこともなかった。小さな決断で悩むし、他人に流されることも冷静に行動できないこともある。結果として、宮部のような生き方ができていないのが現状だ。

久しぶりにこの本を読む中で、私が中学生だった時に母から教えてくれた戦争で夫を亡くし、寂しい思いをした方の話を思い出した。母から聞いた話によると、その方は夫を戦争に送り出した当時お腹に赤ちゃんがおり、その方は認知症になってからも、ずっと夫に「お腹の中に赤ちゃんもおる。頑張っておくんなし。」と言ったことを、後悔し続けていたようだ。「何が何でも生きて帰って来て。」と言えよよかったと。この話から、戦争は行った本人だけでなく、その家族をも長年にわたって苦しめることを知り、辛い気持ちになった。

今もなお世界では様々な国と地域で争いが起き、多くの犠牲者が出ている。一人が与えられた命はたった一つだ。その命は決して他人の意思によって左右されてはならない。幸い日本は平和であり、そのようなことはない。それは大変幸せなことだ。私はこの生活に慣れていてその幸せに気づいていなかった。深く心に刻み、二度と起こしてはならないこと、それが戦争であり、戦争を実際に行ったことも見たこともない私たちこそがそれを心に留める必

要がある。薬剤師となるべく、勉強し続ける中で、うまくいかず辛いときもあるかもしれないが、戦争の時代に比べ学びたいことを不自由なく学べる恵まれた環境に感謝して残りの学生生活を送っていききたい。また、6年後宮部のように、責任感を持ちつつも、心優しさも合わせ持つ薬剤師となっていたら理想的であるし、そうなれるよう努力していきたい。

審査員講評 南谷 直利 (経済経営学部教授)

多くの日本国民は、本書の「0 (ゼロ)」が零式艦上戦闘機のことを示すと考えている。私は、違って感じた。同時に、生きて「0」の意味する感情や人をどんな手段を使っても守り抜かないといけないことを悟った。「0」の表現が人間の無関心を示すと考えると、私が悟った内容の無視する行為は、本当に人間(命が)でなくなるという恐怖を感じる。

「愛」とは何か。「家族」への想いは、離れて生きていても年代を積み重ねても、変わらない『永遠の愛』であろう。『永遠の0』は、第二次世界大戦や反戦の歴史のことを意図している作品ではなくて、その作品本質において「0は、愛や家族を示す」ことを訴える。私も五十四歳になって改めて考えさせられた。つまり、「愛や家族」が基軸である作品と言える。それゆえに、ある女子学生が筆を執ったのであろう。

「人を愛する」ことの意味を中多萌さん(薬学部1年次生)はよく分かっている。彼女の豊かな感性に感心する。人が心を惹かれて、振り向いている姿を描写した文字が、「愛」である。中多さんは、特攻隊員や遺族を「愛している」ように感じた。

特攻で散華した宮部久蔵の生きた足跡を辿る、孫の宮部健太郎は、実の祖父を「愛した」。久蔵は、健太郎の祖母の宮部松乃や実母の宮部清子を「愛し」、生きて帰ることを望んだ。しかし、実の祖父は、特攻隊員として二十一型に乗機して戦死した。その後、九年間の長い期間を経て松乃が再婚した、祖父の宮部賢一郎(旧姓大石)も特攻隊員で、五十二型戦闘機で一人だけ帰艦し生き残った。その五十二型には久蔵が乗機するはずであったが、賢一郎と乗機が入れ替わり、久蔵の乗機(二十一型)が帰艦することはなかった。松乃と結婚した賢一郎は、遺族の松乃と清子を「愛した」。

第三章の表題は、「真珠湾」である。私もパールハーバーに行き、アリゾナ記念館を訪館したことがある。戦艦アリゾナがパールハーバーに沈んでいる。私も祖父の南谷直二を「愛している」。今、己の中で祖父の足跡を辿りたいという想いが、確信的に強くなっている。

皇后陛下御前講演(香淳皇后、昭和七年四月十四日、東京第一陸軍病院)の写真である。私の祖父(陸軍少佐、叙勲四等瑞宝章、功七級金鵄勲章、満州国景雲章、従軍記章、写真左から二人目)は青年期に陸軍士官学校に入校し、卒業と同時に第九師団司令部参謀部付副官大尉として同校教官となる(郷土資料研究会)。祖父は上海事変時に左腕を負傷しており、左腕の不自由さもあったが、私には個人的なことを一切語ることはなかった。いかなる時代でも、上海事変や第二次世界大戦における家族への考えや想いを語れる機会を持てれば、私は嬉しく思う。戦場からの命の持ち帰りが、「功命」である。



◆◆ 第2回ビブリオトーク開催 ◆◆

令和2年1月14日(火)、図書館本館ソフィアルームで行われた第19回読書感想文・第1回書評コンクール表彰式の後、昨年度に引き続き、第2回ビブリオトークを行いました。最優秀賞・優秀賞の学生5名が自分の読んだ本について、その本を読んだきっかけやおすすめポイントなどを熱く語り、他の入賞者達は興味深く聞き入っていました。また、審査委員の先生方からは講評もいただきました。



◆◆ 読書感想文・書評コンクール入賞作品の図書 ◆◆

本館1階の読書コーナーに入賞作品の図書を配架していますので、是非、読んでみてください！
その他にも、読書コーナーには、小論文・レポートの書き方や映画化・ドラマ化される原作等、話題の図書を配架しています。



◆◆ 寄贈図書 ◆◆

本学の役員・教職員から、下記のとおり図書の寄贈がありました。紙面を借りて厚く御礼申し上げます。

書名	寄贈者
『幻庵上・下』他	計34冊 泉 洋成 (理事)
『先端医療シリーズ36 リハビリテーション医学の新しい流れ』他	計9冊 三浦 雅一 (理事・薬学部教授)
『経済原論研究への誘いー小幡理論をめぐって』	南野 茂 (理事・事務局長)
『最新臨床検査学講座 遺伝子・染色体検査学』他	計3冊 滝野 豊 (医療保健学部講師)

北陸大学図書館報 NO. 48 令和2年3月31日発行

編集・発行：北陸大学図書館 〒920-1180 金沢市太陽が丘1-1 TEL. 076-229-3021 FAX 076-229-4850

Eメール：tlib@hokuriku-u.ac.jp 北陸大学図書館ホームページ：<https://www.hokuriku-u.ac.jp/about/campus/library/>